
姉上様の謀略

七崎 雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉上様の謀略

【Nコード】

N3828Y

【作者名】

七崎 雨

【あらすじ】

唯一の肉親である弟は幼いころ、王子に顔が似ているからというだけで影武者として城に連れて行かれた。残された姉は泣き寝入りするしかない、と思いきや……「見てなさい王子、今に吠え面かかせてやるわ!」 いつの間にか地位も能力も最強になっていた姉が、なんか不憫な王子を怒鳴り散らす話。

1 1 姉上様はかく語る

国というのは、厄介なものだ。

シアンは溜息を一つつくと、馬車の窓から外の景色を見渡した。ここには、今まで暮らしていた田舎とはまるで比べものにならないほど、人も物も多い。

彼女は長いまつげを数回しばたかせると、その景色をしつかりとその瞳に焼き付けた。目線を上げるとそびえ立つのは、大きな城。僅かに瞳を細め、彼女はそれを睨むように見上げる。

自分が魔術師であると気付いたのは、10を数えた時だった。何気なく貸本屋で借りた魔術書を読んでみたところすらと理解でき、ついでに簡単な魔法陣を描いてみたところ、いとも簡単に魔術を使うことができた。魔術書の文字は魔力のあるごく一部の者にしか読むことはできず、さらに魔法陣は、形を知っていても文字を描くのには用いる媒体、たとえばチョークや、指先なんかは魔力を乗せることができなかった、永遠に発動しない。

魔力を持つて生まれてくることですら珍しいのに、それをすぐに使いこなすことができる者など、片手でも多すぎるくらいに少ないのだ。つまるところ、シアンは天賦の才に恵まれた子だった。

それからは、死に物狂いで勉強をした。本を読み漁って、魔の森で修業をして、効果があると聞けば滝にも打たれた。その成果が、18になるころにはその名を国中に轟かせるほどの魔術師になり、ついに国からの要請も受けた。国同士直接の争いはもう何十年も起きていないが、それでも暗殺や謀略のはびこる世である。特に『先読みの力』に長けたシアンのことを欲しがっているのは、この国だけではない。牽制し合ってギリギリ均衡を保っている今、『先読みの力』はどんな剣にも代えがたい力なのだ。

実際シアンも何度か追手に出会ったことがあるが、先読みのでき

る彼女にとって、その追跡をかわすことは造作もなかった。そうして今日、シアンはこの国お抱えの魔術師となる。

「ふふ……やったわ、ついにやったわ。……見てなさい、王子」

シアンは王からの文を賜ったその日、透き通るような緑色の瞳にほの暗い喜びを滲ませていたのだった。

「魔術師様、到着致しますのでご用意をお願い致します」

「わかりました」

従者の声に答え、彼女はフードを被る。

すぐに扉が開かれ、外へ降りる。整然とした石畳が敷かれ、左右に多くの兵が立ち並んでいる。

「すげー、あれが『先読みの魔女』か？まだ子供じゃねーか」

「魔術師だからな、歳ぐらいごまかしてるかもしれないぞ」

ひそひそと兵士の話す声が耳に届く。シアンが少しでも顔を上げると、ぱちりと目が合ってしまった。

「あ、いえ、なんでもございませ、あつ！」

青ざめてそう弁解した兵士が手にしていた護衛用の槍を、石畳の上に落とした。金属のぶつかる高い音が響き渡る。

「おい、なにやってんだよ！」

「う、すみませ……」

シアンは慌てる兵士にゆっくり近寄ると、従者の止めるのも聞かずその槍をそつと拾い上げた。

「あ……」

「ふふ、そんなに慌てないでください。どうぞ」

シアンはにつこりと微笑んで、兵士の手に槍を戻した。

「あ、ありがとうございます……」

「いいえ」

翠の瞳がふわりと細められ、フードの間から金髪がさらりとこぼれる。

摘みたての花のようなその笑みに、声を掛けられた本人だけでなく、周りの兵士たちもが目を見開いて硬直した。

シアンは従者の後ろに戻って、それから思い出したようにくるりと振り返った。

「そうそう、言い忘れていましたけれど、私この前18になったばかりですよ?」

悪戯っぽくふふ、と笑うシアンを見て、兵士たちは初心な乙女のように頬を染め上げたのだった。

「魔術師様、こちらへどうぞ」

シアンは無言のまま後に続いた。

城の中は煌びやかで、靴で踏んでいる赤い絨毯は明らかにシアンの部屋の毛布よりも上等だ。毎日あれにくるまって寝ていた自分がとんでもなく滑稽に思えてくるが、そうではない。ここの奴らがかしいのだ。

シアンには弟がいた。弟のデイスはやんちゃだが優しい子で、幼くして両親を失った2人はとても仲が良かった。一緒におままごともしたし、追いかけてこもした。かくれんぼで自分のことを見つけられず、泣き始めてしまったことはしばらく弟をからかうときの種になっていた。多くの一般国民がそうであるように、自分と弟も王族に関わることなど当然ないと、その頃のシアンは思っていた。

国から使いが来たのは、シアンが6つ、デイスが4つの時だった。デイスは初めて間近で見る騎士たちに興味津々だったが、シアンはなぜだか不安でたまらなかった。もしかすると昔から勘の利く方だったし、この頃から無意識に先読みの能力が使っていたのかもしれない。

使いの言うには、デイスをこの国の王子、クリスヴィン・アレリックの影武者として城に迎えたいということだった。年の頃も背丈も外見も似通っていて、親もいない孤児院育ちのデイスは、影武者

の条件にぴたりと当てはまってしまった。

城ではもうデイスが迎えられることは、ほとんど決定事項だった。シアンがどんなに泣いても喚いても決定が覆ることはなく、弟は数日の後城へと連れて行かれた。

「ねーちゃん、おれ城でもがんばるから、ねーちゃんも泣くなよ？
てがみかくからさ！」

そう笑って言ったデイスの姿を忘れたことは、ただの1度もない。

王子の影武者と言うのはずっと昔から続いているもので、王子がまだ幼い時だけ、代わりとして影武者が人前に出る。しかし1度影武者として城に入ったものは、重要機密を知ることになるため、役割の終わった後も生涯城から出ることは許されない。孤児院はデイスのおかげで潤ったし、シアンも勉強に励むことができたが、ちつとも嬉しくは無かった。

弟に会いたかった。自分とよく似た顔立ちが、屈託なく笑う姿を見たかった。大きくなった弟のことを、どうしても一目見たかった。「どうして、私が遠慮しなきゃいけないのよ。何が一目会いたいよ、ふざけんなっての。姉が弟に会うのに理由なんているか！一目も二目も会わせる！」

そう叫んだ瞬間、彼女は閃いた。そうか、弟が出られないのなら、私が行けばいいんだ。

そこからは人の変わったように勉強し、偶然手にした魔術書を読みふけり、彼女は歴史に名を残そうかというほどの大魔術師になったのだ。

1 2 姉上様はかく語る

「クリスヴィン王子、魔術師様にご到着なされました」

荘厳な扉の前、使いが大きな声で私の来訪を伝える。

「入れ」

低くよく通る声が、部屋の中から響いた。 王子だ。

「失礼いたします」

使いの後に続いて、部屋に入る。謁見の間にはピンと張りつめた空気が漂っていた。シアンは顔を伏せたまま王子の御前まで歩き、無言のまま両膝をつく。問われていないのに勝手に話すことは、王族に対して失礼にあたるからだ。シアンは叩きこんだ礼儀を尽くして、王子の顔を見たいと逸る心を押さえた。

「魔術師殿、長旅ご苦労だった。どうぞ顔を上げて楽にしてくれ」

王子の声が頭上に降ってくる。シアンは出来るだけ恭しくフードを取り、エメラルドの瞳を露わにした。

ほう、と謁見の間に、護衛やメイドたちの感嘆の息が漏らされた。シアンは普段魔術師らしくその容姿を簡単に晒したりはしないが、その姿を見たものはみな口を揃えて、女神のごとき美しさであった、と彼女を語るのだった。

これからは好きなだけ、王子の顔を拝むこともできるのだ。シアンはすぐに王子の顔を眺めるような無礼な真似はせず、瞳を伏せたままに薄く笑みを浮かべた。

「有難きお言葉頂戴致します。白の魔術師、シアン・ミストラルと申します。この度は王子殿下直々の……」

シアンが口上を述べようとしたとき、王子のすぐ後ろに控えていた一人の騎士が首を傾げた。

「姉ちゃん……？」

きょとんとこちらを見つめるヘーゼルの瞳と目が合うと、シアンは一度大きく目を見開いたが、あくまで落ち着いた様子を装い笑っ

た。

「久しぶりね、デイス」

「姉ちゃん、やっぱり姉ちゃんだろ！？うわー、何してんだよこんなところまで来て！」

デイスは昔のままの懐っこい笑顔を輝かせ、シアンに駆け寄った。
「悪い、みんな下がってもらえるか。この人は俺の姉だ、王子に害なすような真似はしない。俺が責任を持つ」

デイスは控えている騎士たちにそう声を掛けた。

城へ上がるというシアンの計画は面白いほど思い通りに進んだが、ただ1つ想定外だったのは弟が騎士、それもかなり位の高い、王子付きの護衛騎士になったことだった。

通常影武者として城に迎えられたものは、一生をほぼ幽閉される形で終える。贅の限りを尽くす代わりに、自由を奪われて死んで行くのだ。

しかしデイスは、影武者時代に学んだ剣術が思いのほか成果を出し、年若くして教師を打ち負かしてしまうほどの腕前を見せた上、12の時には御前試合で優勝してしまった。影武者が御前試合に出ることさえ異例の事態だったが、成長とともに運良く顔立ちも背丈も王子とは離れていったため、特別にある程度の自由が認められたのだという。

影武者の存在を知っている一部の者たちはデイスの扱いに悩んだが、間違いなく腕が立ち、その上国の機密事項を知ってしまったという彼である。下手に扱うくらいなら騎士として城に縛り付けておいた方が安心だと思ったのだろう、デイスは史上最年少にして王子付きの護衛騎士という、人に言わせると大変名誉な役職を賜ったのであった。

デイスの言葉を聞きどうするべきかとうろたえる騎士たちに、クリスヴィンが『いい、下がれ』と命令した。騎士たちは短く返事を

し、メイドも頭を垂れると、美しく列を成し謁見の間を後にした。ギイ、と重苦しい音を立て、扉が閉められる。それを確認すると、シアンは顔を綻ばせた。

「デイス、久しぶりね！もう、こんなに大きくなっちゃって！」

昔の面持ちを残しながらもすっかり大人びてしまったデイスを見て、膝をついたままシアンは王子のことなどそっちのけで言う。

「姉ちゃんもすっかり女らしくなっちゃって、っていうか先読みの魔術師って姉ちゃんのことだったの！？教えてくれればよかったのに」

「ふふ、驚かせたかったの」

デイスは手を取ってシアンを立ち上がらせると、思い切り抱擁を交わした。12年間手紙でしか会話を交わすことはできなかったの、騎士らしく引きしまった腕も、自分より随分伸びてしまった身長も、嬉しくて、切ないものを感じた。

「ほらクリス、俺のいっつも言ってる姉ちゃん！美人だろ！？」

デイスが肩を掴んで、見せびらかすように王子に姉のことを向かい合わせた。そこでシアンは初めて、王子の姿を目にすることができた。

透き通るような金の髪に、ヘーゼルの瞳。弟とパーツは似ているが、騎士である弟に比べると肌が白くやや細身で、どことなく影のある、繊細そうな面持ちをしている。ガラス細工のようだと巷で囁かれているのも頷けると、シアンは思った。

「デイス・ミストラルの姉、シアン・ミストラルでございます。お目にかかれて光栄です」

「ああ、デイスからよく話は聞いていた。まさか名高い先読みの魔女が、その姉君とは夢にも思わなかったが。デイスには世話になっている。魔術師殿も何か必要なものがあれば、遠慮せずに言ってくれ」

王座に腰掛けたまま、クリスヴィンは言った。弟の手紙にあったように、王子と弟は親しいらしい。

「有難きお言葉に御座います。では一つお願いしても宜しいでしょうか」

シアンが頭を垂れて言うと、王子はなんだ、と耳を傾けた。

「少しばかり、殿下のお時間を頂けないでしょうか。この先の私の務めについて、いくつかお聞きしたいことがあるのですが」

シアンが言うと、王子はいささか拍子抜けしたかのように、しかしすぐにまた引き締まった表情に戻って言った。

「そんなことか、いくらでも言うがいい。デイス、ついて来てくれ。話なら私の執務室で聞こう」

王子が立ちあがって、階段を下りる。デイスの隣に並ぶと、王子の方が幾分背が低く華奢で、2人はもうあまり似ていなかった。

「こちらへ」

「行こうぜ姉ちゃん」

謁見の間を出、広すぎる廊下を静々と歩く。デイスの立ち居振る舞いは上品さ溢れるクリスヴィンのそれとは違い、あくまで騎士らしいものだった。きっと意図的にそうしているのだろう。

シアンは弟を見て、少しだけ寂しそうに笑った。

1 3 姉上様はかく語る

王子はデイスとシアンを執務室へ通すと、人払いをするように申しつけた。

机の上には大量の書類が乗せられており、壁には本が並んでいる。腰に剣を差しているし、一国の王子なのだから剣技もできるのだろうが、普段はここで机に向かっているのだろう。

「そちらへ座ってくれ。私は魔術師の礼儀などはよくわからんだ。魔術師殿も堅苦しく思わず、思うことがあれば言ってくれ」

執務室の椅子にゆったりと腰掛け、王子はシアンに促した。その横にデイスも控える。

しかしシアンは何故か返事をせず、腰掛けようとしめない。ただ突っ立ったまま、黙って下を向いていた。

「どうした？魔術師殿」

クリスヴィンが怪訝そうに眉をひそめる。デイスもおや、と首を傾げた。

「姉ちゃん？」

シアンは俯いて、細い肩を震わせていた。真っ白いローブの上に、金の絹糸のような髪がかかる。

「……いに……」

何かぶつぶつ呟いているが、よく聞こえない。クリスヴィンが、
「おい、どこか具合でも……」

とメイドを呼ぼうとしたとき、シアンの顔が上がった。顔中に、
恐いほど美しい、黒い笑みを浮かべて。

「……ついに、ついに来たわよ！見たか、この私の意地を！今日までの血の滲む努力、汗と涙と泥水の日々、全ては今日のためだわ！」

「……な、なに……？」

クリスヴィンがあまりの彼女の変貌ぶりに、ついていた頬杖を滑らせた。デイスもぼかんと口を開けて、姉を眺めている。先ほどま

でのしとやかで美しい彼女は、一体どこへ消え失せたのか。

困惑する2人をよそに、シアンは手にしていた杖をびつと王子に向けると、敬意も恭しさも消え失せた態度でのたまった。

「あんたは私の顔も知らなかったんでしょうけどね、私は初めて新年祭に行ったあの日、遠目でその顔を一目見た時から、あんたの顔を一度たりとも忘れたことは無かったわ！私の弟を身代わりにして生きてきたあんたのことをね！」

クリスヴィンが事態についていけず、呼吸を忘れ目を見開いている。

尚も怯まず、シアンは王子である彼にこう続けた。

「残された私がどんな気持ちで毎日過ごしてきたかわかる？ たった1人の身内がいつどうなるかもわからないのに何もできないこの気持ち、あんたに理解できるかって聞いてんのよ！ 孤独に耐えて必死に学んで、そして私は掴み取ったわ、自分の幸せをね！」

狂気さえ滲ませて、シアンは笑みを浮かべた。

「……………」

クリスヴィンは無表情のまま、呆けたように姉を見ている。

それまで驚いて黙っていたデイスだったが、さすがにまずいと思っただのか、ほんのり苦笑いを浮かべて口を開いた。

「ね、姉ちゃん、俺は結局死ななかったし、こうして騎士になることもできた。クリスは王子とは思えないほど俺に良くしてくれて……」

「……」
「黙りなさい！」

シアンが、がん、とすごい音を立てて杖を床に打ちつけると、デイスは『はい……』と引き下がるしかなかった。昔から姉に口喧嘩で勝てたことは、ただの1度も無かったのだ。

「デイスが死ななかったのも騎士になれたのも、全てはただの結果でしかない。偶然この子の顔があんと似なかったただけよ！もしそうじゃなきゃ、デイスは騎士になることも許されなかった。そうでしょ？」

「……そうだ」

クリスヴィンは押し殺したような声で答えた。正にその通りだったからだ。

「あんたは私の弟の人生を自分のものにして、そのくせ姉である私の顔も知らず、金だけ渡せば満足するとも思ってたわけ？ふざけんじゃないわよ！」

シアンは蛇でも睨み殺しそうなほどの視線でクリスヴィンを見据える。

弟が自分の運命を今や受け入れていることは知っていた。そんなものじゃないのだ、この怒りは。

「歴史的に続いてきたことだか知らないけどね、そんなの私には関係ない、その時代でそうなった人が、勝手に怒ればいい！私は今、この制度がどうか弟のためとかじゃなく、私があんたにムカついたから怒ってんのよ！仮にもあたしの弟を身代わりにしようっていうんなら、三つ指ついて挨拶に来んのが姉への礼儀つてものでしょうか！」

もはやクリスヴィンもデイスも、何も言わずに固まっているだけだった。シアンはふん、と鼻を鳴らすと腕を組んで一転、睨まれただけで凍りついてしまいそうなほど冷やかな表情になり、クリスヴィンを見下ろす。

「私のこと、不敬罪にでもなんでもするがいいわ。まあ、あんたの個人的なプライドが傷つけられることと、『先読みの魔女』を失うこと、どちらがより痛手になるか考えてみるのね。デイスに何かしてみなさい。この城一つくらい飛ばすのなんて、私には造作もないことよ」

最後だけまた恐ろしく眉を歪めて、置物のように黙っているクリスヴィンを睨みつけた。

一度この男に怒鳴ってやらねば気が済まなかった。城へ上がるだけならばメイド試験に合格すればよかったが、こいつの下に使用えてへこへこするなんてまっぴらごめんだ。相手が王子だとかそん

なものは関係ない。これは姉としての、シアン・ミストラルという人間としての意地なのだ。

だからわざわざ、向こうから頭を下げて自分を招待せねばならなくなるほど力を付けた。決して楽な道ではなかったが、彼女はついにやり遂げたのだ。先読みの魔女の名は、それほどの価値がある。

ただ、シアンの得意とする魔術は白の領域なので、城1つ飛ばすほどの攻撃魔法が本当に使えるかというところである。つまり、最後の台詞に関してはただのハツタリだったのだが。

「お、おい待て、話は……」

つかつかと出口へ向かいドアノブへ手を掛けた時に、戸惑ったままのクリスヴィンが声を掛けてきた。シアンは振り返って その顔は、地獄の門番も泣いてしまうほど恐ろしく、そして美しいものであった。

「私に用があるなら、あんたが私に尋ねてきなさい。 このもし」

ぎり、と鋭い視線を残し、ボタン、とすごい音を立てて、ドアが閉められた。

部屋の中に、数秒の静寂が訪れる。クリスヴィンは顔を引きつらせながら、隣に立っているデイスを見た。もしかすると彼も、優しかった姉の変貌に困惑しているのではないか。

視線をやると、デイスは閉じられた扉をじっと見てから、

「 さすが姉ちゃん、やるな」

そんな素っ頓狂なことを呟いて、にやりと笑った。

クリスヴィンは信じられないというように目を見開いてから、深い溜息を吐き、椅子に沈んだ。

頭の中で、彼女の言葉と、あの鋭すぎる視線がぐるぐる回る。たしか先読みの魔女は別名『慈愛の魔女』と呼ばれていたような気がするのだが。 一体何の間違いだ？

予想外すぎる展開に、クリスヴィンは額を掌で覆う。

今日掛けられた、と言うよりむしろぶちまけられた言葉の全ては

彼の言葉を抉った。しかし、1つだけ彼には納得できないことがある。

クリスヴィンは薄眼で天井を見、もう1つ溜息とともに、口を開いた。

「もやし……だと……」

その日の夜、鏡の前で小1時間ぶつぶつ呟く半裸のクリスヴィンの姿を見たと、メイドの間で専らの噂になってしまうことを、まだ彼は知らない。

1 3 姉上様はかく語る（後書き）

これにて1話はおしまいになります。

サブタイトルは姉の暴走です 笑

もしかするとかなり停滞したりもするかもしれませんが、まだまだ続く予定です。

コメントなどいただけると七崎がにやにやします。
読んでくださってありがとうございます！

2 1 王子殿下はかく語る

「一体、なんだあいつは……」

クリスヴィン・アレリックは、執務室で頭を抱えていた。最近の悩みの種はもっぱら、魔術師であり、王子付き護衛騎士デイスの姉でもある、シアン・ミストラル嬢のことだった。

数日前にこの城に招かれた彼女は、まだ18というのに国中に名を馳せるほどの大魔術師であつた。下々の噂によれば、災害によって傷ついた人々のことを助け、先読みによって幾度も人々を導いた、聖女のごとき慈愛に満ちた人物であるという。その容姿はめつたに見ることが叶わないが、目にしたもの皆がまるで女神か天使のようであつたと褒め称えるのだそうだ。

国民は皆、心優しい『先読みの魔女』に焦がれ、彼女をモデルにした本や寸劇なども存在するほどであつた。クリスヴィンも、口にしたことこそなかったが、彼女の噂を聞いてからは一目見てみたいと思つていたのでつた。

それがまさか、あんな女とは。

「クリス、見ろよコレー、姉ちゃんが焼いてくれたクッキー！欲しいだろー？」

「いらん！そんな恐ろしいもの食えるか！」

クリスヴィンが怒鳴るが、デイスは『そう？うまいのになー』とメイドの淹れたお茶を片手に、嬉しそうにクッキーを頬張つた。クリスヴィンとしてはそのような何を入れたかわからないものを口にするなんて信じられないが、彼女は弟に対しては、というより自分以外に対しては良い人なのであろう。腹の立つことに。

「姉ちゃんの作る料理は世界一うまいぜ？なんてつたって俺の姉ちゃんだからな！」

「意味がわからん！　なんなんだあの女は！大体お前の話と全然違っただろうが！どこが優しくて素敵な人なんだ！」

昔からデイスの話の半分以上は、故郷に残してきたという姉のことだった。強く優しく美しい姉がどれほど素晴らしい人かということとを、耳が痛くなるほど何度も何度も聞かされたものだ。

「優しいぜ？それに美人だったろ？」

デイスがにかつと笑うと、クリスヴィンは書類を捲る手を止め、渋い表情を作った。

「それはまあ、不細工とは言わんが……」

確かにシアン・ミストラルは美人だった。白金の髪は淡く煌めき、大きな緑の瞳はガラス球のように澄み切っている。その肌は白く、薄く光を纏っているのではと錯覚させるほど輝いて見えた。

クリスヴィンはこれまで美しい令嬢を腐るほど見てきたが、彼女ほど凜として、清らかな印象を与える者はなかなかいないだろう。かく言う自分も、はじめて彼女を目にした時は、思わず見入ってしまったものである。　まあすぐに、そのことを海よりも深く後悔する羽目になったのだが。

とはいっても、クリスヴィンは自分の非を認めていた。

影武者として城に迎えてからというもの、デイスのことは大変丁寧に扱わせ、かつてでは考えられなかったほどの自由を許すように言いつけた。自分もデイスと同じだけ剣の練習に励み、毒の耐性を付け、周りが止めるのも気にせず友人のように振る舞った。夜にはこっそりと部屋を抜け出したデイスと、朝まで語らったりしたものだ。生まれた時から『王子』であつたクリスヴィンにとって、それは新鮮で、孤独を埋めてくれるものだった。デイスが御前試合に出たいと言った時にも、反対派をねじ伏せてデイスのしたいようにさせてやった。

しかし、彼女の言っているのはそんなことではないのだ。生まれながら『王子』として生きてきた自分は、他人に『与える』という

ことに慣れ過ぎてしまっていた。彼女に怒鳴られたあの日、友人だと言いながら無意識のうちに自由を『与えた』つもりになっていた自分が恥ずかしくて堪らなかった。そしてそのことをもし知っても何の咎めもなく許してしまいそうなのこの友人のことを思うと、吐き気がするほど自分が最低な人間に思えて仕方がなかった。

クリスヴィンとて謝ろうと、思ってはいたのだ。

なのに彼女ときたら、彼の使うフォークを机に張り付けたり、靴の中に砂を入れたり、何故か自分のお茶にだけ塩が大量に入っていたり……。

「子供の悪戯か！ 年頃の女のすることとは思えんぞ！」

実に幼稚でくだらない、しかし厄介な悪戯を毎日毎日ねちねちとそれも絶対に犯人が彼女だとばれない様に仕掛けてくるのだ。

「はは、俺たち孤児院育ちだからさー。そういうの得意なんだよ」

そう言えばデイスも、いつもやけに要領よく部屋を抜け出して来ていた。孤児院を出た者は、皆あのようになってしまうのだろうか。

恐ろしい。王室育ちの自分には、到底わからない世界だ。

「もう嫌だ……なんとかしてくれ」

クリスヴィンは視界を覆うと、情けない声を出し椅子に沈む。

あんなに嫌味な性格のくせに、彼女は何故かメイドや騎士たちからの評判がすこぶる良く、『本当にシアン様は素敵な方よね！』『女神のようなお方だわ』などと言われている。猫かぶりの上手い女である。腹立だしいことこの上ない。

「ちゃんと素直に謝った方がいいよ。姉ちゃん1回怒ると、めっちゃくちやこえーから」

「それは、よくわかった……」

もううんざりだというように呟いたクリスヴィンの顔には、疲労の影が浮かんでいる。

デイスが、ま、がんばれよ、と笑って、最後の1かけを口に放り込んだ。

2 1 王子殿下はかく語る（後書き）

そういえば前回ナチュラルにもやしとかでできましたが、はたしてこの世界にもやしは存在するのか……？

2 2 王子殿下はかく語る

あの女の態度は許し難い。幼稚で陰険で忌々しいことこの上ない態度だ。しかし、彼女の言い分はある１点を抜かせば最もだった。自分は断じてもやしではない。

クリスヴィンは天井を見上げて、はあ、と溜息を吐いた。

「謝るべき、なのだろうな」

誰にでもなくそう呟くと、彼はもう１つ息を吐いたのだった。

クリスヴィンはその日の夕、シアンの部屋の前に佇んでいた。

王子として生まれてきてからというものの、命令することには慣れていたが個人的に人に謝ることなどほとんどなかった。逆に、王子である以上必要以上に弱みを見せるな、常に堂々としているという教育を受けてきたのである。

王子殿下は今まで味わったことのない種類の緊張を抱えて、迷いながらもドアをノックした。

「どうぞ」

誰かと問うこともなく、中からそう返ってくる。自分が今日訪れることをもしかしたら知っていたのだろうか。『先読みの魔女』ならば、それも可能だろう。

「失礼する」

クリスヴィンがドアノブを捻り、中へ一歩足を踏み入れた途端、
「っ！」

靴底がおもしろいほどすべり、足が宙に浮いた。

特殊な加工でも施したかのように異常につるつるに磨き上げられた床は、摩擦抵抗をもつともせず革靴を華麗に受け流す。咄嗟にドアノブに手を伸ばすが時既に遅し。クリスヴィンは素っ頓狂な声を上げ、冷たい床にしたたかに尻を打ち付けた。ぐえ、と蛙が潰れる

ような声が彼の口から漏れる。

「う、お、お前……！」

クリスヴィンが困惑しながらもシアンを睨んだ。床が自然にこれほどの光沢を放つはずもない。何のつもりだ、と怒鳴ろうとしたその時、王子にとっては残念なことに、廊下から戸惑った声が聞こえた。

「お、王子……？」

クリスヴィンが顔を引きつらせたまま視線を上げると、ちょうど廊下を通りかかっていたメイドが困惑した表情を浮かべてこちらを見下ろしていた。

「……………」

「……………」

互いに見合いながら、硬直する。いつもなら『王子と目が合っちゃった！』なんてはしゃぐところだが、今の彼女にそんな頭はない。「ま……まさか転ばれて……だ、大丈夫ですか？あ、私、医者……」

わたわたと慌てるメイドから顔を逸らし、クリスヴィンは

「いい、かまわん。下がれ」

とそっけなく言った。眉間にいくら深いしわを刻みつけたところで、その頬は今羞恥でうつすら染まっている。

いきなり何もない（はず）のところで転んだのだ。しかもあのガラス細工のようだとか、人形のようだと言われている王子が。メイドははじめのうちこそ本気で慌てていたが、だんだん事態を理解してきたのか、次第にその口端にこらえきれない笑いを燦らせる。

「は、はい。……失礼いたします」

肩を震わせながら去っていくメイドを見て、クリスヴィンは頭を抱えた。きっと明日には、メイドたちの間に広まっているのだろう。『え？王子が？』『そうよー！盛大に尻もちをついて、うろたえてらっしゃったそうよ』『なんて会話をクリスヴィンが思い描いたかどうかは定かでないが、その顔は絶望に打ちひしがれていた。

「ぷ、あはははははは！」

諸悪の根源が悪魔の如き笑い声を上げるのが聞こえる。クリスヴィンは即座に立ち上がると扉を閉め、シアンの座る椅子につかつかと近寄った。

「お前、一体何のつもりだ！これで明日から俺はメイドの笑い物だぞ！」

シアンは読んでいたらしい本を閉じると、ちっとも反省のうかがえない顔でクリスヴィンを見上げた。

「いいじゃない、メイドさんにだって笑う権利くらいあるわ」

「誰がそんな話をしているか！俺は仮にも王子だぞ！？威厳とか、いろいろあるだろうが！」

「このくらいでなくなる威厳なら、最初から堀にでもポイしちゃいなさい」

澄ました表情で、おどけたように彼女は言う。

な、なんて可愛くない女なのだろうか！

クリスヴィンは白い頬を更に赤く染め憤慨した。怒れば怒るほどシアンが面白がるということに、未だ気づいていないようだ。

「それで？何か用かしら？」

シアンがこの前の自分と同じように、頬杖をついて言う。いや、俺はあんなにふんぞり返りも、偉そうな態度も取らなかったぞと苛立ったが、自分が何をしにここに来たかを思い出し、クリスヴィンはなんとか怒りを鎮めた。

「く、その……」

クリスヴィンは言いくそうに眉を寄せたが、拳を握ると、がばつと床と水平になるほど頭を下げた。

「すまなかった。先日のそちらのお叱り、御尤もであった。王子としてではなく、クリスヴィン・アレリックとして……貴女に礼が言いたい」

シアンは突然のことに驚いたように目を見開いて、頬杖を止めた。つむじが見えるほど腰を折るクリスヴィンを見遣って、瞳を細める。

「お礼？」

謝罪ではなく？とシアンは訝しげな表情を作る。

クリスヴィンは頭を下げたまま、しばらく黙っていたが、やがて、ああ、と押し殺したような声で答えた。

「貴方の弟君……デイス・ミストラルには、何度も救われた。

もちろん命もだが……デイスは、私の唯一心を許せる……友人、だ」
クリスヴィンが言って、また少しの沈黙が訪れる。

「顔を上げて」

シアンの静かな声に、ゆっくりと王子が面を上げる。射抜くような視線を投げってくる彼女を同じく見返すと、クリスヴィンは続けた。

2 3 王子殿下はかく語る

「私は生まれながらにして王子だった。王子というのは、人の上に立つものだ。決して弱音を吐いてはいけないし、特定のものと親しくすることも許されない。私の身分をうらやむものも多いし、実際恵まれているのだらうと思うが……それでも、私は孤独だった」

母は自分を生んですぐに死んだ。父は立派な王だったが顔を合わせることも少なく、どうしても自分の父という風には見られなかった。厳格で正しい王。それがクリスヴィンの、父への印象だった。

自分を取り巻くのは仕事として世話を焼くメイドと、国と王子を守るために存在する騎士。たまに顔を合わせる貴族たちも、領地拡大、婚約、ご機嫌取りと腹の中で渦巻いているのだらうと思うと吐き気がした。それは、まだ幼かった自分には、少し重すぎる枷だった。

「デイスが城に来た日のことは、今でもよく覚えている。潑刺とした元気な少年で、私とは全く対極にある者のように見えた」

これが自分の影武者だなんて、信じられなかった。彼は、いつでも楽しそうに笑う、太陽のようだったから。

「デイスが私と食い違ふところの無いようにと、勉強も食事も、ほぼ1日中を共に過ごした。あいつは影武者としてももちろん立派にやってくれたが……それ以上に私に友人として振る舞ってくれた。

外を見たことのない私に、たくさんのことを教えてくれた。孤児院でのくだらない悪戯の話や草花の見分け方、それに 大半は、姉上殿、あなたの話だった」

シアンは未だ微動だにせず、クリスヴィンの顔を見ている。彼は一度深く呼吸をし、そしてまた続けた。

「私は初めて聞く外の様子に心を躍らせ、家族というものに焦がれた。デイスの話はすべてが新鮮で、輝いて思えた。 私は、デイスのことを……羨ましいとまで思っていたんだ」

姉を語るデイスの顔は輝いていて嬉しそうで、自分もその話に心を踊らせた。しかしそれと共に、僅かな、胸につかえるものも同時に感じた。

今ならわかる。あれはきっと、寂しさなのだろう。自分にとってただ1人の親友にとっては、自分が1番でないことへの寂しさか、自分にはそのように語れる話が無いことへの寂しさか。もしかすると、その両方だったのかもしれない。

けれど、デイスはいつも明るく、共にいると自分まで明るくなれそうな気がした。一緒に背負ってくれる人がいるということが、これほど心を軽くするとは思わなかった。彼の自由を奪って、本来なら抱えなくても良かったものを分かち合って、それでもデイスは、友人なら当たり前だと笑って言うてくれた。たった1人の家族に、会いたくないはずがなかったのに。

「デイスには、本当に救われた。かけがえのない友人と想っている。デイスの自由を奪ったことも、貴女の孤独を顧みずにいたことも、本当に……申し訳なかった。けれど……酷い話だが、私は彼に会えたことを本当に、嬉しく思っているんだ。……あの頃も今も、デイスがデイスであるのは、貴女のおかげなのだろうな。勝手な話だが……貴女に礼が言いたい。デイスに会わせてくれて、ありがとう」

そう言っただけクリスヴィンは一瞬目元を和らげると、嬉しさと悲しさが混じって出来そこなった笑顔のようなものを浮かべる。

シアンはそんな彼を見てぴくりと眉を動かし、それからゆっくりと唇を開くと、ぽつりと落とすように言った。

「あなたにお礼を言われる筋合いはないわ」

「ああ、そうだろうな」

彼女の硬い声に、クリスヴィンは自嘲めいた表情で、僅かに唇の端を上げる。

当然の報いだらう。これくらい言われないと、いけないのだ。影武者の存在を知っているものは皆、それは王子である自分のた

めには必要な犠牲で、王子とそのほかの人間では命の重さが違うのだ、と言った。殿下は自分の身を自分で守れる自信がありますか、貴方の身体は、貴方だけの物ではないのですよ、と。

そして張本人であるデイスは、決して自分のことを責めなかった。いつだって彼は笑うのだ。友達だったら当たり前だろ、と言つて。

自分に、彼と友人である資格などあるのだろうか。

「デイスが」

突然落とされたシアンの声に、クリスヴィンは顔を上げる。目が合うと彼女はなにか神秘的な面持ちでじっとこちらを見てから、唇を開いた。

「デイスがあなたのこと……褒めてたわ。ちょっとお堅いけど、いい奴だつて。いろいろあったけど、あなたと会えてよかったって」

「デイス……」

クリスヴィンは拳を握りしめた。彼はなんて優しいのだろうか。こんな自分にも、そんな言葉を掛けてくれるなんて。

クリスヴィンがそんなことを考えていると、シアンが眉を寄せた。「ちょっと、あんたバカじゃないの？ デイスが同情とか、そんな気持ちでこんなこと言うと思ってる？」

クリスヴィンが固まっていると、シアンは更にむっとして腕を組む。

「デイスは人を心配させないためにオブラートに包むくらいはするけど、嘘は付かない子よ。あなただってわかるでしょ？」

強い翠に見つめられ、クリスヴィンは目を見開く。

初めて、嬉しさで情けなさで泣きたくなつた。彼は自分の威厳に掛けて決してそのような真似はしなかったが、なんとか、ああ、とだけ答えて俯いた。

「そうだな……私は自分だけでなく、デイスのことまで侮っていたようだ。彼は、俺の……大切な友人だ」

再び顔を上げたクリスヴィンは、ぎこちなく、しかしどこか晴れやかな笑みを浮かべていた。

その顔を見て、シアンは眉を僅かに動かす。

この男が、型どおりの王子殿下などだったら怒鳴り散らして引きずり下ろして、死ぬより痛い目見せてやるうと思っていたのだけれど。

彼女は少し考えてから、諦めたように1つ息を吐いた。

「まあ……あんたも反省してるみたいだし、もういいわ。私もちょっと言い過ぎた感あるし……悪かったわね」

シアンはそう言っ、ふっと視線を逸らした。

「は……？」

もしかして今、謝ったのか……？ クリスヴィンが目を見開いたまま硬直していると、シアンはむっと口を曲げる。

「なによ、私だって謝ることくらいあるわよ。あの時は長年の苛立ちをぶちまけたかっただけ。ま、反省したんならいいわ。お互い水に流しましょ？」

いつまでもふんぞり返ってるような奴なら容赦はしなかったけどね、と付け加えて、彼女は意外なほどあっさり表情を緩めた。

クリスヴィンとしては、『今すぐ土下座して靴を舐めなさい頭踏ませなさいひれ伏しなさい』くらい言われるのではと気負って来たので、なんだか拍子抜けしてしまう。

そんなことを考えていると、

「別に、許してほしくないんならそれでもいいのよ？」

顔に出ていたのだろうか、彼女がにやりと笑ったので慌てて手を振った。

「いや、そんなことはない。……ありがとう」

クリスヴィンが言っ、シアンはふふ、と笑いを漏らして立ち上がった。

「美味しいお茶があるの。クッキーも焼いたし、よかつたら一緒にどう？」

既に用意をしながら言う彼女のの中にはクリスヴィンが断るという

選択肢はないようだ。強引な女である。

しかしその顔は　デイスに聞かされていたように、優しく美しい笑みをたたえていた。

「ああ……ありがとう」

昼下がりのあたたかい陽気が惜しみなく注がれる中、クリスヴィンは少しだけ微笑んだ。

こんな、清々しい気分はいつ以来だろうか。

クリスヴィンはゆるく笑みを浮かべて、彼女が勧めてくれたクッキーを一口かじり、そして……

「か、からあああああつ！」

激辛だった。大急ぎでお茶を口に入れると、今度は　激苦だった。

「う、うええ……」

「あははははははは！」

思わず口に含んだお茶を、カップの中に吐きだしてしまう。汚いとか思わないでほしい、床にぶちまけなかっただけ上出来だ。

「な、な、おま、なんのつもり！」

回らない舌に半泣きという情けない様子でクリスヴィンが睨みつけると、彼女は心の底から楽しそうに笑った。

「だって、あなたからかうのおもしろいんだもん！」

天使のような笑顔で、悪魔のようなことをのたまった。

「ふ、ふざけるな！」

信じた自分が馬鹿だったのか？これが素晴らしい姉で、世紀の大魔術師だと！？

もう嫌だ……と頭を抱えた彼に、シアンは憎たらしいほど美しい笑みで言った。

「これからよろしくね、クリスヴィン」

王子の受難は、まだまだ続きそうである。

2 3 王子殿下はかく語る（後書き）

これにて2話はおしまいです。ここで終わるはずだったんですが、まだ姉様が王子で遊び足りないって言うので続きます。毎日更新とはいかないかもしれませんが、がんばって書いていくのでよろしくお願いします！

姉様と王子に拍手してくださった方、ありがとうございます！王子はこれからも不憫な目に合うので、よかったら応援してやってください^^笑

ありがとうございました！

3 1 王子殿下のお仕事

「デイス、まだ玉ねぎ嫌いなのか？ちょっとは食べないとだめよ。ほら」

「うえー、姉ちゃんにあげる」

「こら、人の皿に寄越さないの！はい、口あけて」

「うー、へーい……」

「……………」

「姉ちゃん姉ちゃん、これ町で見つけたんだけど、姉ちゃんに似合うと思って！」

「え、くれるのか？ありがとうデイス、お礼にケーキでも焼くわ」

「やったー、俺チョコのがいい！」

「チョコね、わかった。あとで届けましょうか？」

「ううん、俺もついてく！」

「そう？ふふ、じゃあ一緒に作りましょ」

「うん！」

「……………」

「あ、デイスお帰りー」

「姉ちゃん、また俺の部屋勝手に入って……この辺男ばかりなんだから、あんまり夜遅くに来たらダメって言ったじゃん」

「私を誰だと思ってるのか？大丈夫よ」

「俺が心配なの！これからは俺が迎えに行くまでちゃんと待ってて」

「えー、でもデイスに早く会いたいんだもん」

「む……………」

「いいでしょ？デイス」

「わかったよ。……でも、頼むから気をつけて来てね」
「まかせなさい」

「……………おい」

沼の底から聞こえてくるような押しつぶされた声に、シアンとデイスが、なに？と顔を上げる。その視線の先には、整った顔を恐ろしく歪めて、大変怒っておられるクリスヴィン。

「お前ら……………いつもいつも人の目の前でベタベタベタと、一体何なのだ！おかしな噂を立てられたくなければ、もう少し姉弟らしい振る舞いをしろ！」

額にぴきつと青筋を浮かべて、眉を吊り上げたクリスヴィンが憤慨する。

重要人物であるシアンと、自分の警護をしているデイス、3人である時間が必然的に長くなってしまうのは、仕方ないことだと理解している。

しかしこうも毎日人の目の前でベタベタベタされては、さすがにクリスヴィンとて居辛いことこの上ないというものだ。何故自分の執務室で、自分がこんなにも疎外感を味わわなくてはならないのか。

クリスヴィンの言葉に、シアンは美しい眉をほんの少し寄せた。

「はあ、嫌だわ。私たちの姉弟愛を、そんな汚らわしい目で見ないでくれるかしら？」

彼女は軽蔑するようなまなざしをクリスヴィンに向けると、『デイスはあんな穢れた人間になっではダメよ？』などと弟に言い聞かせている。しかもデイスも『うん、わかったよねーちゃん』などにこにこ笑っているではないか。

「デイス、お前一体どちらの味方なんだ！」

クリスヴィンが拳を震わせてそう問うと、彼の唯一無二の親友、デイスはきょとんとクリスヴィンを見て、

「姉ちゃん！」

満面の笑みで答えた。

「……………」

そんな質問するなんてみみっちい男ね、と言うシアンの声もおぼろげに、クリスヴィンは絶望に打ちひしがれた。

今やこの城に自分の味方など、1人もいないのではないか？

クリスヴィンは一人執務をこなしながら、うおおと頭をかきむしった。

城中のメイドに憧れのまなざしを注がれ、城中の騎士にちやほやされて。あの女はいつの間にか、城中を掌握しているようにさえ見えてきた。

「……………はあ」

クリスヴィンはペンを置くと、椅子に深くもたれかかった。

こんなことを考えていても仕方がない。さっさと仕事を終わてしまわねば。

クリスヴィンは重い身体を起こすと、いくら書いても減らない書類の山に再び手を付けた。

「クリス、最近ちゃんと寝てるか？」

デイスは食事にも来ず、執務室にこもりっぱなしのクリスヴィンの顔を見つめて心配そうに呟いた。

クリスヴィンの父は大変厳格で、それまでにあった貴族の横領や官吏たちの不正を、かなり厳しく取り締まった人であった。当然貴族たちからはやかまれていたが、民衆からは大変支持されていた。クリスヴィンは彼の父ほど重圧を感じさせるようなオーラを纏ってはいなかったが、彼もまた不正を許せない性質である。そして自分にも厳しいので、いつも仕事が溜まると執務室から1歩も動かなくなるのだ。

民衆の理想の王であつた彼の父、その子供にのしかかる期待は、前代以上に重いものである。クリスヴィンはいつだかデイスに、『国民が期待してくれているなんて、王子として誇らしいことではないか。私はその期待を超えられるよう、努力するだけだ』と言つたことがある。しかしデイスは、幼い頃の彼が毎晩のようにうなされ、体調を崩していたこともまた知っているのだ。彼の肩にのしかかるものの重さは、いくら元影武者とはいえ、自分には一理解できないものなのだろう。

「クリス、ちよつとは休まないとダメだぞ」

デイスがそう言つと、クリスヴィンはうつすらとクマを作つた顔を上げる。

「いや、まだ平気だ。今日中にこの書類を書き終えてしまいたいのでな」

クリスヴィンはゆるく微笑むと、再びペンを動かし始める。このようなやり取りは今まで何度も行つてきたが、クリスヴィンが大人しく休んでくれたことは1度もなかった。

「んー……じゃあ、なんかせめて食つてよ。甘いものでも持つてこようか？」

デイスは心配そうな顔でクリスを見る。クリスヴィンは、いや大丈夫だ、と断ろうとして、

「ああ、頼む」

デイスと目が合うと少し考えてからそう言つた。倒れてしまつては元も子もないのだ。腹が空かずとも、多少のエネルギーは摂つておかねばなるまい。

「おっけー。ちよつと待つてろな！」

どこか意味深な笑みを残して部屋を後にしたデイスを見て、クリスヴィンはなんとなくいやな予感がした。

3 2 王子殿下のお仕事

「はろークリスマスヴィン」

そしてその予感は大的中した。戻ってきたデイスはティーポットと菓子だけでなく、何故か姉まで伴っていた。

「な……」

「あら、随分景気悪い顔してるわね。死人みたいよ」

そんな失礼なことを言うと、彼女はよいしょ、と我が物顔でソファに腰掛けた。ティーカップと焼きたてのシフォンケーキが、机の上に並べられる。

「さ、早くお茶にしましょ」

「わーい」

シアンの横にデイスも座ると、2人してクリスマスヴィンの方を見ってくる。

「お前の作ったものなんて食えるか！何が入っているか考えただけでも恐ろしい」

クリスマスヴィンが忌々しげに言うと、シアンはふっと目を細めた。

「あら、そんなに期待されたら答えたくなっちゃうじゃない」

「期待などするか！」

思わず大声で叫んだせいで、頭がくらくらする。やはり、寝

不足なのだろうか。

そんなクリスマスヴィンを見て、デイスは、ははと笑った。

「クリスー、本当に睡眠薬とか入れられなくなかったら、早くこっち来た方がいいぜ」

「うふふ」

隣でシアンが完璧に美しい笑みを浮かべる。やりかねない、

この女ならやりかねない。

クリスマスヴィンは仕方なく重い腰を上げると、2人の向かい側にどかっと座った。

「ほら、これで満足か!？」

「はい、よくできました」

シアンが小さい子にするように、ぱちぱちと手を叩いてくる。クリスヴィンは、ふざけるな、と怒鳴ろうとしたが、これ以上余計な体力を使うのも面倒になって止めておいた。

「……………」

「……なんだ」

シアンはクリスヴィンを見て少し何か考えるような素振りを見せたが、

「……んー、別に」

そう言っ、て、いただきまーす、とお茶を口にした。

デイスはお菓子をもごもごと頬張って、『やっぱねーちゃんの作ったのが1番だな!』『あらあらうふふ』なんて茶番を繰り広げている。

そんな2人を横目にクリスヴィンはうんざりしながらお茶を1口飲んで、

「……………」

不思議そうにカップの中を眺めた。

「もしかして初めて飲んだ? 私たちの故郷の特産品なんだけど、良い香りでしょ?」

こっちに来る時持ってきたの、とシアンが言うと、

「いや、これなら以前デイスに飲ませてもらったことがある」

とクリスヴィンが首を振った。

「あら、そうなの?」

「うん、前姉ちゃんが送ってくれたのあげたんだ」

デイスの言葉に、シアンはなるほどね、と頷いた。文通しかできなかった10年ほどの間、2人は物を送り合ったりすることも多かったのだ。

クリスヴィンはもう1口お茶を含んで、それから疑わしげに眉を寄せた。

「お前、何か入れたのか？」

「……………あら」

クリスヴィンの言葉にシアンは少し驚いてみせて、それからふうん、と彼のことを見つめた。

「あなた意外と鋭いのね」

感心感心、と頷くシアン。クリスヴィンは『お前一体なにを……！』と怒鳴ろうとしたが、彼女はそれを遮って言った。

「別に何も入ってないわ。ただちよつとカップにまじないがしてあるだけ」

「まじない？」

「そ、ちよつとしたおまじないよ」

クリスヴィンとデイスが彼女の顔を見て、続いてカップに視線を落とす。特に変わったところはないように思えるが、と2人が首を傾げるのを見て、シアンは笑った。

「目に見えるものじゃないわ。ちなみにクリスのは緑、デイスのは赤、私のは黄色のまじないよ」

「え、俺のにも？ ぜんっぜんわかんねーや」

デイスが空になったカップを手の中にくるくる回してみるが、やはりただのカップだ。

「普通はわからないものよ。クリスはちよつと神経質なのね」

「あー、たしかにきつちりしてんの好きだよなー。蜜柑のすじとか、魚の小骨も全部きつちり取り除くタイプ？」

「やーね、男なら鶏だろうと魚だろうと頭から尻尾までバリバリ食べなさい」

「俺を殺す気か！？」

どう考えても喉に刺さる。そんな間抜けな死に方は絶対御免だ。王室と言うのは時折おかしな人が生まれるもので、痴情のもつれの後女に刺されて死んだり、ある日自分は本当は魚なんだと言い張って海に飛び込みおぼれ死んだ先祖もいる。そんな彼らと自分がひとまとめにされるなど、考えただけで恐ろしい。

「それで、黄色とか緑とか、一体何のことだ？」

だんだん面倒になってきたクリスヴィンがため息交じりに聞くと、シアンは少し考えてから、机の上に指でくるりと円を描いた。その指先から白い光が漏れて、淡く光りだす。

驚いた顔をするクリスヴィンに「あら、魔術を見るのは初めて？」

と笑って、シアンは円の中心を通るように線を引き、その両端に『白』『黒』と文字を描く。

「魔術の基本は白と黒。この2つは対極にあって、白は未来を、黒は過去を司っているの。私は『先読みの魔女』って呼ばれてるけど、それはただの通り名で、魔術師的に言うと『白の魔術師』ね」

続いてシアンは、円を6等分するように、更に2本線を引く。また白い光が溢れ、机の上に文字を残した。

「そして白と黒を基本に、魔術は6つの領分に別れるの。この白に近い方が緑と黄色。緑は森と安息を、黄色は大地と知識を司るわ。そして黒に近いのが繁栄と炎の赤と、水と変化を司る青。対極にある領分を操るのは難しいけど、隣り合うものくらいならちょっと上級の魔術師になると使えたりするものよ」

ということとは、白の魔術師である彼女が赤のまじないをしたというのは、かなりすごいことなのではないだろうか。やはり先読みの魔女の名は伊達ではないということか。

シアンの話を黙って聞いていたデイスが、カップを片手に首を傾げた。

「えーっと、じゃあ俺はなんか繁栄するってこと？」

シアンは少し笑って、

「そんなにすごいものじゃないわ、ちょっとした景気づけみたいなものよ。デイスはいつもよりちょっと疲れにくかったり、クリスは身体が安まったり、私は少し頭がすっきりする、そんな程度のもの。あまり強すぎる魔術には、いろいろな制約がもたらされるものだから」

そう言っただけで机の上の文字を掌でふき取るようにする。すると淡い

光はすうつと消え、元通りの美しい木目が現れた。

「う、うわー、すげー！魔法じゃん魔法！姉ちゃん本当に魔術師なんだなー！」

「あつたり前よ、私の努力と天賦の才を舐めないで頂戴？」

ちよつと悪戯っぽく笑って、でもこれくらいのことならまだ序の口よ？と彼女は言った。

3 3 王子殿下のお仕事

「なんだか本当に身体が軽くなった気がするな」

お茶を終えて、ソファの上でクリスヴィンが肩を押さえながら言った。バキバキに凝り固まっていた筋肉が、少しほぐれたような気がする。

「私にかかればこれくらい朝飯前よ。あつたかいもの飲むこと自体もいいんじゃないね」

シアンはティーポットを下げ、ソファの上でくつろぎながら言う。「そうそう、クリスもこれからはちゃんと休息とんなきゃダメだからな？バシッと休んで、ビシッと仕事する、これが出来る王子様ってな」

にかつと笑ったデイスにクリスは『ああ』と返事をして、それから

「……………」

「クリス？」

かくん、と首を折った。

「え、クリスどうしたんだよ？」

慌ててデイスがクリスヴィンに近寄り、顔を覗き込むと　クリスヴィンはうつすらと息を立て、眠っていた。

「あれ？クリス？」

不思議そうに目を見開くデイスの後ろで、シアンが椅子から立ち上がって、

「あら、もう寝ちゃったの？」

事もなさにそう言った。

「　姉ちゃん、なんか盛った？」

デイスがたおやかな笑みを浮かべる姉を見上げてそう聞くと、彼女はいいいやと首を振った。

「盛ってないわ。ちよっと…………まじないを、ね？」

姉の言葉にデイスが首を傾げる。

「どゆこと？」

「緑の領分にもいろいろあるのよ。クリスのカップに掛けたのは、身体の疲れを取るまじない。でもクリスのフオークに掛かったのは、睡眠を促進するまじない」

姉の言葉にデイスは苦笑いする、かと思いきや、

「すげー、そんなこともできんの？さすが姉ちゃんはずげーな！」

はしやぎながらそんなことを言った。クリスヴィンが起きていたとしたら、身体の不調も忘れて怒鳴り散らしているところである。

「まーね。彼、そろそろ限界だったし」

姉の言葉にデイスが再び首を傾げる。たしかにクリスヴィンは働き過ぎだとは思うが、普段からこんな調子だ。

シアンは僅かに目を細めて、弟に微笑んだ。

「黄色と緑の領分に精通していればわかるけど、精力の巡りが悪くなったのよ。このままじゃもうすぐぶっ倒れるところだったわ」

「そっかー。ありがとな、ねーちゃん」

デイスはクリスヴィンを見て苦笑を漏らした。本当に、仕事に関してはかなり優秀なのに、困った王子様だ。

シアンはそんな弟の姿に小さな笑みを漏らすと、クリスヴィンの書き物机の上に乗っている、大量の書類に目をやった。

「ふむ……なるほど。これくらいなら私にも理解出来るわ」

ぱらぱらと捲って、シアンは頷く。

「あ、俺もやる！昔はクリスの振りしているいろいろやってたし、結構計算とかも得意だよ」

「そうね、じゃあ一緒にやりましょ」

類稀なる才能の持ち主である姉と弟は簡単にそう言って、取りあえずクリスヴィンを寝室に運んでから仕事をすることにした。

デイスが易々とクリスヴィンを抱えて運び（ちなみにお姫様抱っこと呼ばれる類のものだったので、後にメイドたちの間で大変噂になってしまっ）、彼をベッドの上へと下ろした。

普段眠りの浅い彼がここまで深く眠っているのを見るのは久しぶりのことだった。

白い肌に、痩せて少しばかりやつれ、しかしそれすら儂げに見せる、繊細そうな面持ち。

シアンはそつとクリスの顔を覗き込んだ。『高貴な王子様』もこうして目を閉じていると、彼もまた自分と歳の変わらない、ほんの子供であるということがよくわかる。

デイスも姉の横からクリスヴィンを覗き込み、安らかな彼の寝顔を眺めた。

「よく寝てるな」

「よく寝てるわね」

2人は顔を見合わせると、どちらからともなく子供のような、まだ2人が孤児院にいたころとまったく同じ、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「おいお前らああ！これは一体どういうことだ！？消せ！今すぐ消せ！」

「ぶあつはつはつはつは！」

「あははははははは！」

数時間後、目が4つになったりひげが生えたり額に謎のマークが描かれたりしたクリスヴィンが部屋に駆け込んだのだが、その道中で彼が誰かに目撃されなかったかというところ……それはまた、別話である。

3 3 王子殿下のお仕事（後書き）

これにて3話は終了です。

あくまで自分比ですが、たくさんの方に読んでいただけて本当にうれいす！ありがとうございます！

読者さまは一体誰を気に入ってくださっているのか、とか、今のところ王子に見せ場はない気がするけどそれってどうなの？とか思うところはありますが……彼らの魅力を引き出していけるように頑張りたいと思います。

よろしければこれからもお付き合いください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3828y/>

姉上様の謀略

2011年11月19日19時52分発行